

第二の
ふるさとを
探して

第8話 —— 海をめぐる、
水をめぐる

京都・京丹後

「海の京都」として静かな光を放つ京丹後。
その大地の7割以上を覆う森は、
長い歳月をかけて、豊潤な海を育んできた。
森と海の繋がりをたどるようにして

京丹後エリアを巡ると、
山から海へと続く水の物語が、
風景の中に静かに姿を現す

写真・斉藤有美 文・渡邊卓郎

京 丹後エリアや丹後半島と聞いてすぐにイメージされ、観光客が集まる場所といえば、天橋立や伊根の舟屋が挙げられるだろう。半島の付け根から海岸線を反時計回りに車を走らせ、観光客で賑わうそれらの景勝地を過ぎると、やがて行き交う車の数も減り、静かな土地の風景が姿を現し、ゆったりとした時間が流れだす。

海に四方を囲まれた日本では、古くより、人々は畏怖と敬意の念を込めて海に接してきた。人と海を繋ぐものとしても神話や伝承があるが、丹後半島もまた数多くの伝承に彩られる地だ。日本人にとって最も馴染みの深い、海にまつわる昔話の一つであり、全国にいくつもある浦島太郎の伝承において、伊根町の浦嶋神社に残る伝説は、風土記や日本書紀、万葉集にも記されるなど、日本で最も古い浦島伝説とされている。

そんな数々の伝説の舞台となり、伝承が残る丹後半島を特別な土地にしている大きな要素には、複雑な地形と海が存在があるだろう。半島の中央部を占める丹後山地とリアス式海岸の世界は、この土地をほかにはないものになっている。リアス式海岸は、起伏の激しい山々が海に沈み込むことで生まれた地形。そのため、海と山が接している独特の景観になるのだ。そして、リアス式海岸では、栄養を多く含んだ山からの水が広い平野で分散することなく、川を通じてそのまま海に流れ込むため、海の水には栄養分が豊富に含まれる。こうして丹後半島ならではの生態系が育まれているのだ。

海岸線を巡る旅では、その豊潤な海そのものといえるようなものとの出会いがあった。

「純粹に目の前の海の水、それだけです。それをしていねいに炊いて時間をかけながらじつくりと凝縮していくことでこの塩が生まれます」

「鳴砂」で有名な琴引浜の近くで通りかかった工場に立ち寄ると、『琴引の塩』の安井晶俊さんは快く



上：険しい山々と海に挟まれた土地を利用した棚田の景観は、長い年月をかけて形成された自然と人の営みの調和である。下：浦嶋神社はおよそ1200年前の丹後豪族であった浦嶋一族の業績をたたえて建立されたといわれている。



約20mの高さにおよぶ巨大な安山岩の一枚岩である「立岩」。この地に伝わる三鬼退治の伝承では、聖徳太子の異母弟である麻呂子親王が退治した鬼たちを立岩に封じ込めたとされている。



右：丹後半島では冬から春には真牡蠣、5月から9月にかけては濃厚でクリーミーな味わいの岩牡蠣が旬を迎える。『風蘭の館 牡蠣小屋』にて。
左：砂州により日本海と隔てられた潟湖である久美浜湾の穏やかな海。



豊かな海は、 滋味深い食の恵みをもたらす



全国各地の知られざる魅力を
ダイナースクラブの
目利き力をもってお届けします。

※本誌84～85ページをあわせてご覧ください。

右：琴引浜の静かな海。下右：ミネラル豊富な塩は、塩サイダーなどの商品にも使用される。下中：釜炊きで使用する燃料は廃材を加工した薪を利用している。海水をじっくりと炊くことで、雑味のない味が生まれるという。下左：コツについて尋ねると「特別なことはしていませんよ。慌てないことです」と安井さんは語ってくれた。

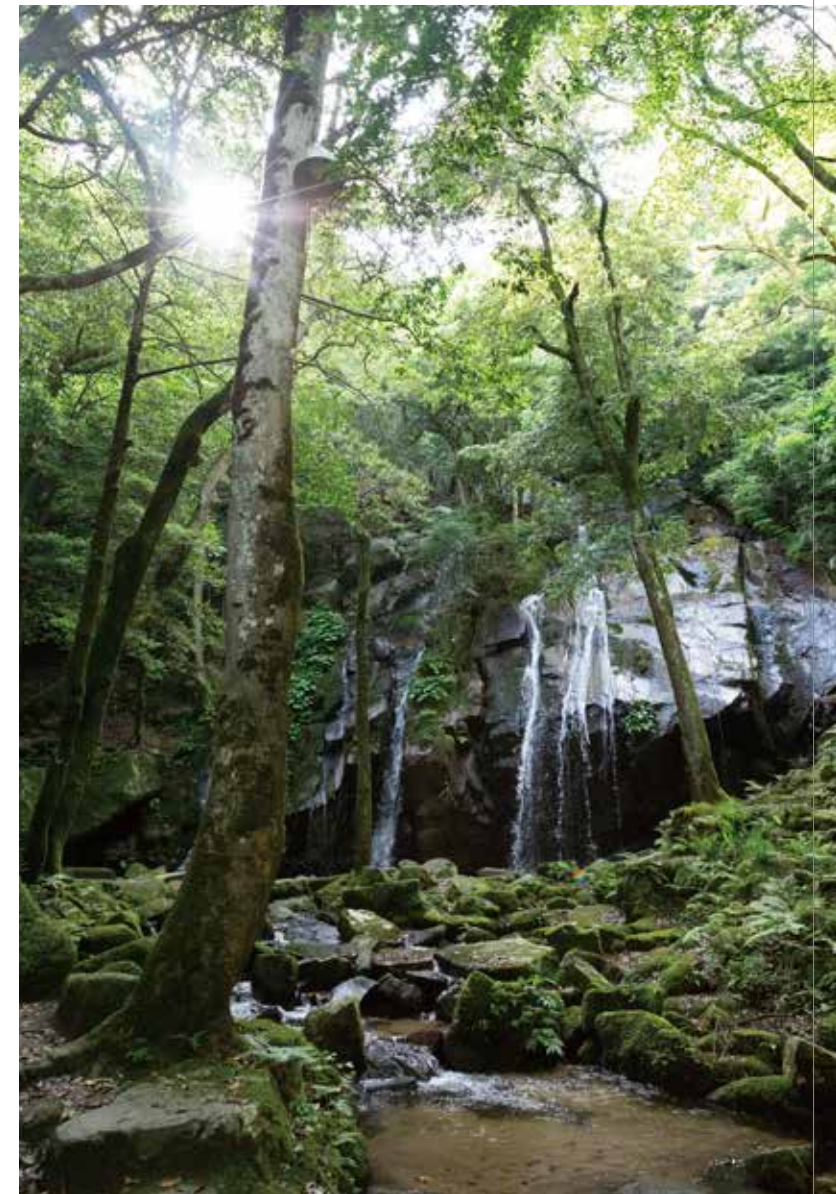


宮津市の金引山麓にあり、標高150mに位置する金引の滝は、岩盤を滑るように水が落ちる分岐瀑。京都府で唯一「日本の滝100選」に選ばれた名瀑である。滝の周辺は美しく流れる水の音で満たされていた。



京丹後市久美浜町の神谷太刀宮にある巨大な岩「磐座」は、岩の割れ目の隙間からさす朝日の角度によって、農作業に適した時期を知ることができたと伝わり、古代祭祀の跡と考えられている。

水が循環し、森が海を育てる



工場の中を見せてくれた。琴引浜の近くから海水を汲み、伝統的な平釜製法で炊き上げる。美しく結晶化した塩を数粒いただくと、深みのある味で、口の中に余韻がいつまでも残ることに驚いた。

一つの釜に入る約350リットルの海水からできあがる塩の量はわずか10キロほどだという。海水が製品となつて店頭に並ぶまではおよそ2週間。長い時間をかけてこの地域の海が姿を変え、塩になるというわけだ。

旅館を経営していた先代が、目の前に広がる海で何かできないかと考えたのが『琴引の塩』の始まり。戦前から続いた塩の専売が1997年に解禁され、一般企業が塩づくりに参入できるようになった頃のことだった。元々、この地域では日々の暮らしの中に塩づくりがあつたそうだが、それも途絶えつつあつた中で、様々な場所で製塩方法を学び、この土地に合った方法を導き出し、現在に至る。

あらためて丹後半島を地図で眺めてみると、日本海に突き出たその半島の姿からは緑が豊かなことがよくわかる。半島の全面積の7割以上を森林が占めるというから、いかに森が深く重なり合っているかが想像できる。

「森が海を育てる」。その言葉を思い出し、丹後半島の海を育てる森の姿を見たくなつて内陸へと向かう。訪れたのは「金引の滝」。落差約40メートル、幅約20メートルにおよぶ美しい滝である。岩肌を切り裂くように激しい音を立てて流れ落ちる滝、そこから川が始まり、少しずつ水流を弱めながら穏やかに水は流れていく。その水はやがて大手川に合流し宮津湾にそそがれて海の水となる。その当たり前だが尊い自然の営みに、あらためて心を打たれる。

森で生まれた水が肥沃な土壌を作り、豊潤な海を育むという自然の循環、絶え間なく繰り返される水の循環を感じ、感謝の心で満たされた。

